

浅野晃年譜



1901年（明治34年）滋賀県大津市に生まれる。東京帝国大学（現・東京大学）在学中に第7次『新思潮』を創刊。1926年（大正15年）に日本共産党に入党。1928年（昭和3年）の三・一五事件の直後に検挙され、翌年獄中で転向。1930年（昭和5年）同党離脱。その後、文学者、詩人、評論家として文壇で活躍し、「日本浪漫派」「新評論」「文学界」等に参加した。1945年（昭和20年）から5年間苦小牧に居住。1950年（昭和25年）東京転居後、中央文壇に復帰し、世界・日本文学をはじめ歴史、思想、哲学、宗教など幅広い分野で活動する一方、1955年（昭和30年）から1975年（昭和50年）まで立正大学教授を務めた。

1963年（昭和38年）に出版した詩集『寒色』で第15回読売文学賞を受賞。1990年（平成2年）1月29日、88才にて逝去。

浅野晃は、昭和20年から25年までの5年間、国策パルプ（現・日本製紙）の創業者である旧友・水野成夫、南喜一らの世話で、家族を連れて苦小牧の勇払に居を定めました。浅野が持ち込んだ、その新鮮な思想は地元の知識人に大きな影響を与え、苦小牧とその周辺地域の文化活動に大きく貢献しました。また、腹膜炎を発症し九死に一生を得たのもこの勇払の地でした。このときは王子病院に運ばれましたが、輸血用の血液が足りず、勇払工場の社員が何人も入れ替わり、立ち替わりで献血に訪れたそうです。後に浅野はこのことについて「今日の私は、これらの方々から頂いた尊い血のおかげで生きてあるのだ」と、苦小牧民報『新春回想 忘れ得ぬ人びと』（昭和55年1月1日付）に綴っています。勇払では詩作に励み、ここで構想した主題が作品となったものも数多くあります。後に、三島由紀夫が深い感銘を受け、朗読レコード（ポエムジカ）をだした詩集『天と海』もその一つです。生涯を通じ文学・評論活動を続け、日本の思想・文学史に残した功績は大きく、現在に続く苦小牧の文化活動の礎ともなっています。（文中敬称略）



第15回読売文学賞受賞

詩集「寒色」

1963年果樹園社より発行



日本製紙株式会社勇払工場の公園に設置されている「浅野晃詩碑」

参考資料：浅野晃文学資料展（浅野晃文学資料展と講演の夕べ）実行委員／刊）
勇払工場操業45周年記念誌（山陽国策パルプ勇払工場／刊）
浅野晃詩文集（鼎書房／刊）ほか